

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：33809

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530748

研究課題名(和文) 里親と里子に対するアタッチメントに焦点をあてたプログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a Support Program Focusing on Foster Parent-Child Attachment

## 研究代表者

徳山 美知代 (Tokuyama, Michiyo)

静岡福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：70537604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：里親と里子を対象としたアタッチメントに焦点をあてたプログラムを作成し、その有効性の検討を行った。4組の里親と里子を対象に測度と内省報告による検討を行った結果、里子の問題行動の減少と里親のストレス軽減などに肯定的な変化が見られた。

さらに、里親のプログラムへの内省報告と里子の行動との関連を検討した結果、プログラムの要素である里親の敏感性の向上と、里子に対する安全感・安心感を高める働きかけによって、里子の里親を安全基地とした自律的な探索行動が促進されたこと、そういった肯定的な変化がアタッチメントに関連する問題行動の減少につながる可能性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study, a program to support foster parents and children was developed, focusing on attachment between them, and its usefulness was examined. On measurement of the attachment level and analysis of introspective reports, involving 4 foster parent-child pairs, positive changes, such as children's reduced problematic behaviors and parents' alleviated stress, were observed. Furthermore, when examining the association between foster parents' introspective reports on the program and children's behavior, the enhancement of the former's sensitivity and the latter's sense of safety and security as components of the program were shown to promote the latter's autonomous, exploratory activity, with the former as a secure base for this. It was also suggested that such positive changes may reduce attachment-related problematic behaviors.

研究分野：児童福祉心理学

キーワード：アタッチメント 被虐待 里子 社会的養護 里親支援 介入プログラム ト라우マ

#### ・研究開始当初の背景

現在、児童養護施設には虐待を受けたことを措置理由に入所する子どもが入所児童の60%を越えている。しかし、今後、社会的養護は施設養育から里親による養育に方向付けられる情勢にある。里親と里子の関係については、アメリカでは、頻繁な措置変更による問題行動の頻発傾向が示されており (Fisher, Burraston, & Pears, 2005)、日本においても、申請者の児童養護施設での臨床経験によると、里子となった子どもが関係不調から施設に戻ってくるケースが多く、その子どもの精神的傷つきも大きい。里親委託後に里親が子どもとの関係構築に悩むことも多く、その要因として子どものアタッチメントに関連する問題が示されている (御園生, 2008)。実親以外に特定の養育者と関わる体験を積むことで、アタッチメントの安定化やアタッチメント障害の症状が軽減することが示されており、低年齢の乳幼児を養育する児童養護施設職員や里親に対する、応答性を高めるトレーニングによって、子どもの安定したアタッチメントが促進されることが報告されている (Juffer et al., 2005)。

そこで、里親と里子のアタッチメント関係を促進することで、里子のアタッチメントに関連する問題行動と里親のストレスが軽減されるものと考え、これまで有効性が確かめられている児童養護施設の幼児と CW を対象とする ABP (徳山ら, 2009) を基に、里親と里子の特性に合わせて再構成したプログラムを開発することを本研究の目的とする。

#### 2. 研究の目的

本研究では、幼児から小学校低学年の虐待を受けた里子と里親に対する援助として、アタッチメントに焦点をあてたプログラムを開発し、有効性の検討を行うことを目的とする。

#### 3. 研究の方法

(1) プログラムの作成：児童養護施設のケアワーカーと幼児を対象に開発され、効果が確かめられているアタッチメント・ベイスト・プログラム (徳山ら, 2009) を基に里親・里子の支援としての特性を加えてプログラムを作成する。

(2) 有効性の検討：(1) にて作成したプログラムを里親と里子対象に実施し、介入を受けた参加者を対象として、介入の前後に測定を行う。

##### 測度

・里子：アタッチメント障害尺度 (数井・遠藤, 2005)、CBCL (子どもの行動チェックリスト) (坪井, 2005)、トラウマ症状診断基準 (DC0-3、Sheeringa, DSM-TR)

・里親：Parenting Stress Index (PS-SF) 日本語版 (荒木, 2005) (M=53.6、SD=10.8)、エクビ (Boggs et al., 1990)：総得点の治療目標 114 点

#### 終了後のプログラムへの里親の内省報告

##### (3) 分析方法：介入前後の差異

里子のアタッチメント障害尺度、CBCL (T 得点)、里親の PS-SF は 0.5SD を差異の基準とする。エクビによる子どもの問題行動については総得点の数値の差異とした。なお、5 事例の内、里母の内省報告が得られた 4 ケースのみを分析対象とした。

#### 4. 研究成果

##### (1) プログラムの作成

###### 構造

(a) アタッチメントとトラウマに関連する心理教育、(b) 里親とセラピストの面接時に里子と遊ぶコ・セラピストを含む 4 者によるプレイセッション：里子の状態、里親・里子の関係性、里親の養育スキルの把握、(c) セラピストと里親との面接：日常生活での里子の状態把握とコンサルテーション

###### 要素

アタッチメントに関連した課題を持つ子どもは、ネガティブな情動体験時に里親に対してシグナルを出すことが難しい。

そこで、第一に (a) 里親が里子の安全感・安心感を積み重ねることで、里親に対して自発的にシグナルを出せるようにする。そのために、里親に対して子どもに安全感・安心感を与える関わり方と、不安時に安心感を与えることを推奨する。里子に対しては、プレイの身体的な関わりを通して、安全感・安心感を積み重ね、自発性と関係性に働きかける。

一方で、(b) 子どものシグナルへの気づき、シグナルの正確な解釈、シグナルへの適切・迅速な応答といった里親の感性を高める。(a)(b) により、安定したアタッチメント関係を促進することで、里親を安全基地とした自律的な探索行動を促進する。

アタッチメントの視点によるアセスメントとして前掲の要素を用いる。

##### (2) 事例の概要と測度による差異

事例 1：A 子 (1 歳 10 か月、乳児院 - 里親) と里母 A (40 代、里親歴 2 回目、1 回目は上手くいかず)

・概要：介入前の状態：里親よりもテレビを好む。見知らぬ人に近寄り、笑いかけるといった無差別的友好態度、睡眠の問題、床や机に頭をぶつける、床に引っ繰り返るといったアタッチメントに関連する問題行動に里母は困る。

推奨した関わりを里母が実践したところ、#3 から、里母の膝に戻っては、遊びに戻る探索行動ができるようになる。#5 では里子の問題行動もほぼなくなり、里母のストレスは軽減される。保育園の通園開始とともに問題行動が増加するが、里母が困ることはなくなる。#9 では安全基地として里母を利用できるようになり、問題行動も無差別的友好態度以外はなくなる。アタッチメント障害尺度においては内閉、危険行動の減少、統制行動の数値

の減少、無差別と粘着は増加が認められた。幼児用 CBCL では、回避、注意の問題、反抗、外向、総計に減少が認められた。トラウマ症状は介入前後に認められなかった。エクビで捉える子どもの問題行動は介入前：112 から介入後：104 と減少した。養育ストレスも介入前 52、介入後 38 と減少した。

表 1. A 子 アタッチメント障害尺度得点

		内閉	警戒	無差別	危険	粘着	統制
一般	M	20.5	14.1	10.9	7.4	5.2	-
	SD	8.8	6.5	5.6	3.6	2.6	-
	pre	22	17	12	13	8	19
	post	17*	15	15*	5*	13*	13

\* : post-pre < .5SD, \* - : post-pre > .5SD

表 2. A 子 幼児用 CBCL (T 値)

	依存	回避	不安	発達	睡眠
pre	53	59	64	78	62
post	50	50*	64	74	60

  

	攻撃	注意	反抗	内向	外向	総計
pre	54	67	62	60	63	66
post	54	58*	50*	57	57*	59*

\* : post-pre < .5SD, \* - : post-pre > .5SD

・里母の内省報告（抜粋）

具体的に言葉を添えて見守ることは子どもにとって見てもらっている安心感や共感してもらっているという実感に結びついて安定していることも学んだ。子どもの理解と親のカウンセリングの時間でもあった。

・小括

里子のアタッチメント障害尺度による粘着（しがみつ）と無差別的友好態度の増加は、保育園通園と関連あるかもしれないが里母は問題行動の対応に困らなくなった。里母の内省報告に示されているように、プログラムで推奨している里母の関わりによって、里子は里母を安全基地として利用できるようになり、そのことが問題行動からの回復につながったものと考えられる。

事例 2: B 男 (3 歳 8 か月、乳児院 - 里親) 里母 B (50 代、里親歴無、実子無)

・概要: 介入前には里母にしがみついて離れない、里母の髪の毛を引っ張る、叩く、引っ掻く、蹴るなどの B 男の行動に里母は困る。#2 では、プログラムで推奨している関わり方の実践と関わる時間を増加したところ、日に日に問題行動は落ち着き、気持ちが楽になった里母は話す。その後、里親の指示的な関わりが多くなると、B 男も不安定になったため、

そのことについて助言をし、子どもの気持ちに合わせることを勧めると、最終セッションでは B 男は里母に対して素直に要求を出せるようになり、問題行動もほぼなくなる。アタッチメント障害尺度得点は介入後に粘着（しがみつ）は減少、危険行動は増加した。CBCL では非行の問題行動は減少した。トラウマ症状は介入前後ともに認められなかった。エクビによる子どもの問題行動は、介入前 136 点、介入後に 128 点と減少した。養育ストレスは介入前 49、介入後 41 と減少した。

表 3. アタッチメント障害尺度得点

		内閉	警戒	無差別	危険	粘着	統制
一般	M	20.5	14.1	10.9	7.4	5.2	-
	SD	8.8	6.5	5.6	3.6	2.6	-
	pre	14	10	9	3	11	11
	post	14	11	7	10*	8*	12

表 4. B 男 CBCL (T 値)

	回避	身体	不安	社会	思考	注意
pre	50	55	50	52	50	52
post	50	50	50	52	50	50

  

	非行	攻撃	内向	外向	総計
pre	60	50	49	53	54
post	50*	50	49	50	50

・里母の内省報告（抜粋）

子どもの行動や言動が何の信号なのか、考えるようになった。甘えたいときにはできる限り甘えさせ、困っている時や痛い思いをしたときなどにはできるだけ、助けるようにして、対応策がない場合も気持ちが落ち着くような言葉をかけるようにした。

・小括

里母の内省報告からは、感性の高まりと、ネガティブな情動を低減させるといったアタッチメントの原義 (Bowlby, 1969/1982) とも言える対応をしていることがわかる。そういった里母の肯定的な変化とともに里子は里母に対して不安時のシグナルを出せるようになり、子どものアタッチメントに関連する問題行動の減少につながったと考えられる。

事例 3: C 男 (6 歳 9 か月、乳児院 - 児童養護施設 - 里親) 里母 C (50 代、里親歴無、実子無)

・概要: 介入前には、嘘をつくこと、寝つきの悪さ、アンビヴァレントな行動、睨めつける目つき、攻撃行動に里母は困る。未経験な

場面では不安が強くなる。ADHD  
 里母は、指示的で子どもの自己決定を待てない。#8のプレイでは、じっと待つとC男は遊びを創造できるようになり、里母は自分がせっかちなのがわかったと話す。#9：里母は関わり方で子どもが変わる、安全感が大切と話す。子どもの気持ちを理解し、注目獲得行動は受け流し、一緒に遊ぶ時間を通して、里子が受け入れられる体験を積み重ねたところ、介入終了時には、C男の入眠の問題や嘘をつくといった課題はなくなり、感情のコントロールもできるようになる。未経験の場でも不安な様子は見られなくなった。  
 アタッチメント障害尺度得点では、警戒の得点が増加したが平均値以下である。CBCLの注意、攻撃といった外向の課題が減少。トラウマ症状は介入前後ともに認められなかった。エクビに見る問題行動は、介入前 142、介入後 128と減少した。養育ストレスは介入前 54、介入後 47と減少した。

表 5. C男アタッチメント障害尺度得点

		内閉	警戒	無差別	危険	粘着	統制
一般	M	20.5	14	10.9	7.4	5.2	-
	SD	8.8	6.5	5.6	3.6	2.6	-
	pre	20	9	8	10	7	21
	post	20	13*	8	9	8	19

表 6. C男 CBCL 得点 (T 値)

	回避	身体	不安	社会	思考	注意
pre	52	50	55	57	50	69
post	59*	50	53	57	50	58*
	非行	攻撃	内向	外向	総計	
pre	60	71	54	70	66	
post	60	63*	54	63*	59*	

・里母のプログラムへの内省報告 (抜粋)

子どもの行動・言動に振り回されないこと、感情的にならないように気を付けることを学んだ。

・小括

介入後に、里子の未経験の場における不安が低減されたことは里母が安全基地として機能するようになり、アタッチメント関係の肯定的変化とも考えられる。指示的な傾向は継続されたが、自身の関わり方の気づき、アタッチメントの視点による問題行動と情緒の理解が肯定的な変化につながったとも考えられる。

事例 4 : D 男 (6 歳 10 か月、乳児院 - 児童

養護施設 - 里親 - 現里親) 里親 D (50 代、里親歴無、実子有)

・概要：介入前には里母から離れにくく、固まることや冷蔵庫に頭を打ち付ける行為がある。セッションにおいても最初は固まり、里母にべったりとくっついていたが、徐々に探索行動が増え、協力して遊べるようになる。それに連動するように#9では、穏やかに生活する。#10の直前に、夕方、公園で独りぼっちになることがあり、それからは一人になるのを怖がるようになった。介入終了時には、頭を打ち付けるなどの問題行動はなくなる。CBCLは社会、非行、攻撃といった外向の課題は減少し健常域となった。トラウマ症状は介入前後ともに認められなかった。養育ストレスは介入前 47、介入後 49 といずれも平均値以下で差異はない。エクビ得点は介入前には 127 点、介入後には 141 点と増加したが、それらの問題行動が里親にとって問題であるか否かについての質問では、開始前、終了後ともに 8 点であり、差異はない(平均 11 点)。

表 7. D男アタッチメント障害尺度得点

		内閉	警戒	無差別	危険	粘着	統制
一般	M	20.5	14	10.9	7.4	5.2	-
	SD	8.8	6.5	5.6	3.6	2.6	-
	pre	21	12	10	3	9	22
	post	25	10	9	6*	9	20

表 8. D男 CBCL 得点 (T 値)

	回避	身体	不安	社会	思考	注意
pre	63	50	61	68	70	67
post	67	50	72*	53*	56	63
	非行	攻撃	内向	外向	総計	
pre	73	78	68	73	69	
post	56*	64*	70	63*	67	

・里母のプログラムへの内省報告 (抜粋)

子どもの癇癪は私へのアピールであること、それに対して私が相手をする事で、ご褒美をあげてしまっていたことなどに気づいた。セラピストが出来事を的確に分析・解説してくださり、対応の仕方も助言していただけて、それがまさに子どもの行動の変化につながったので、私としては大変、大きな支えとなった。

・小括

里母の内省報告から、親子の相互作用の理解やセラピストの本要素の視点による里子の行動分析・解説、対応方法の助言を日常生活で実践したことが攻撃等の問題行動の減少

につながったことが示唆される。不安の増加は、終了直前の公園で一人になった出来事の影響と思われる。D 男は措置変更が多く、見捨てられ不安が強くなったのかもしれない。

### (3) プログラムの開発

対象数が少なかったため、量的な分析による有効性の検討は行えなかったが、各事例における里親の報告による変化においては、明確な肯定的な変化があり、有効性が示唆された。アタッチメント障害尺度得点は、4-5歳児を対象としているためか、事例3,4の小学生では差異が見られにくかった。CBCLでは事例3,4ともに攻撃性等外向性の減少が認められたのは、強化随伴性によるものも含まれるかもしれないが、里母の里子の気持ち・行動の理解と相互作用の理解が促進されており、アタッチメントが情動制御の発達と関連があることから、本プログラムの効果と考えられよう。事例1,2の1歳10か月~3歳の里子では、里子の安全感・安心感の積み重ねと里親の感性の向上によって、里親を安全基地とした自律的な探索行動を促進するといった本要素に即したプロセスであったことが示唆される。里子の年齢によって、介入の着眼点や効果が異なるかもしれない。

トラウマ症状に関しては、4事例ともに認められなかったため、トラウマ症状の有効性は検討できなかった。里親のストレスに関しても有効性が示唆された。

### <引用文献>

荒木暁子、育児ストレスショートフォーム(PS-SF、19項目)の開発と臨床への応用、兼松百合子、荒木暁子、奈良間美保、白畑範子、丸光恵、荒屋敷亮子(著)PSI 育児ストレスインデックス、社団法人雇用問題研究会、2006、78-83。

Bowlby, J., *Attachment and loss, Vol.1. Attachment*, NY: Basic Books, 1969/1982.

(黒田実郎、大羽薫、岡田洋子、黒田聖一(訳)母子関係の理論 愛着行動 岩崎学術出版社、2000。

Boggs, S.R., Eyberg, S., & Reynolds, L.A., Concurrent Validity of the Eyberg Child Behavior Inventory, *Journal of Clinical Child Psychology*, 19(1), 1990, 75-78.

Fisher, P.A., Burraston, B., & Pears, K. The Early Intervention Foster Care Program: Permanent placement outcomes from a randomized trial. *Child Maltreatment: Journal of the American Professional Society on the Abuse of Children*, 10(1), 2005, 61-71.

Juffer, F., Bakermans-Karbenburg, M. J. & van IJzendoorn, M. H. The importance of parenting in the development of disorganized attachment: Evidence from a preventive intervention study in adoptive families. *Journal of Child Psychology and*

*Psychiatry and Allied Disciplines*, 46, 2005, 263-274.

数井みゆき、遠藤利彦、アタッチメント(愛着)障害と測定尺度の作成、平成14年度~平成16年度科学研究費補助金基盤研究、心的外傷経験が行動と情動に与える影響について 乳児院と家庭群の比較 (主任研究者数井みゆき) 報告書、2005、13-35。

御園生直美、里親養育とアタッチメント、特集アタッチメント、子どもの虐待とネグレクト、10巻、2008、307-314。

坪井裕子、Child Behavior Checklist/4-18(CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴、児童養護施設における調査の検討、教育心理学研究、53巻、2005、110-121。

徳山美知代、森田展彰、菊地春樹、丹羽健太郎、三鈷康代、数井みゆき、児童養護施設の被虐待児童とケアワーカーのアタッチメントに焦点をあてたプログラムの有効性の検討、11巻、2009、23-244。

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計1件)

徳山美知代、田辺肇(里親と里子に対するアタッチメントに焦点をあてた支援に関する検討 介入プログラムにおける里親の内省報告の分析より 静岡福祉大学紀要、査読なし、Vol.11, 2015、1-7。

[学会発表](計5件)

Michiyo Tokuyama, Hajime Tanabe A case study for foster mother and foster child with attachment issues, European Society for Trauma and Dissociation 2014 Conference, 27-29 March 2014, Copenhagen Denmark, Program book p.63.

Michiyo Tokuyama, Hajime Tanabe, A case study of programs for foster mother and foster child with issues related to attachment. World Association of Infant Mental Health(WAIMH) 14th World congress, 14-18 June 2014, Edinburgh Scotland UK, Program book p.56.

徳山美知代、田辺肇、上野永子、後藤和文 リフレクティブ機能と安定したアタッチメントによる不適切な養育環境が解離に与える影響の緩和、日本心理学会第78回大会、2014年9月10日-12日、京都府京都市同志社大学今出川キャンパス、抄録集p.96。

Michiyo Tokuyama, Hajime Tanabe, A case study of an intervention focusing on attachment disturbances between a foster mother and a foster child with attachment disturbances. 20th International Congress on Child Abuse and Neglect, 14-17 September 2014, Nagoya Japan, Program book p75.

Michiyo Tokuyama, Satoru Nishizawa Psychological treatment for children in

foster family care: Attachment-focused intervention for foster parent and children、20th International Congress on Child Abuse and Neglect、14-17 September 2014、Nagoya Japan、Program book p47.

〔図書〕(計 1 件)

徳山美知代、里親 - 里子対象の「アタッチメントに焦点をあてたプログラム」実施の手引き、静岡福祉大学、2015、24。  
ISBN978-4-900742-46-8

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

徳山美知代 (TOKUYAMA, Michiyo)  
静岡福祉大学・社会福祉学部・教授  
研究者番号：70537604

### (2)研究分担者

田辺肇 (TANABE, Hajime)  
静岡大学・人文社会科学研究科 (系)  
研究者番号：60302361